第2回　伊丹 十三さん

文 柘いつか　text by Itsuka Tsuge

私が20代前半、かれこれもう30年以上前の話。「昭和の電化製品」というタイトルの特集で、テレビや冷蔵庫、洗濯機、電気釜などを初めて使った時のエピソードを、漫画家の石ノ森章太郎さん（とても親切な方）、作家の桐島洋子さん（お客様をよく自宅に招いていた）、広告評論家の天野祐吉さん（私は教え子でした）などにインタビューをした。

その中のビッグネームの一人が、ちょうど『あげまん』を撮っていた頃の映画監督・伊丹十三氏だった。

私はまだ駆け出しのコピーライターで、伊丹さんに直接アポイントを取るのは結構勇気がいった。電話を入れたところ、まず沈黙があり、返事も最小限。それでも一生懸命、お願いをした。怒鳴られるかもしれないな、と思ったら、

「その仕事は受けないけれど、可愛い声の君には会ってみたいなぁ」

と言ってくださったので驚いた！当時の私には、若さと情熱しかなかった。

赤坂のテレビマンユニオンへ、ドキドキしながら、のこのこ出かけて行ったのを覚えている。ちょうどホラー映画『スウィートホーム』の編集をされていて、「（レベッカの）ＮＯＫＫＯは実に才能豊かな女性だ」と褒めておられた。

予想外だったのは、男というよりもおじいさんに近い人で、作務衣を着て、ぶどうの蔓で編んだ大きなカゴを持っていらした。

伊丹さんは近所の「キャンティ」という店で「幻のコーヒー」をオーダー。

「君が写真を撮られるときは、右より左向きから撮ったほうがいいね」

などと、両手でフレームを作り、映画監督らしくアドバイスしてくれた。

撮影中の『あげまん』の話と、やたら詳しい鰻と食べ物の話、女優の奥様のことを「宮本信子」と呼ぶのが印象的だった。

「君は今、何をしているの？実際」

「コピーライターと、本当は作詞家になりたいんですけど、どうしていいかわからないんです。それから、ハワイに何度も行きたいので、思いつきで妹とハイレグ水着を輸入販売していて、この前は『ａｎａｎ』に掲載されました」

「それが一番面白いじゃない！」

伊丹さんは興味を示してくれた。

私が緊張していることを伝えると、

「いいや、それだけ話せれば十分ですよ」

微笑まれ、恥ずかしかったのを覚えている。恋愛談義にもなり、

「結婚はしきたりと手順があるものですが、恋は突然やって来る、お客さんのようなものですよ。だから、風通しを良くしておかないとね」

いつか、そういう恋愛をしてみたいなぁと思った。

「今日は楽しかった。渋谷まで送りましょう」

カーコレクションの中から、ブルーメタリックのベントレーで２４６を走り、渋谷駅まで送ってくださった。

「もし、将来君に子どもができたら、その時は子育てについていろいろ教えてあげますよ。いいかい？女の子が生まれたら、お父さんが初めての恋人になる。親子はね、そういう存在なんですよ」

それから年に1、2回は、一緒にお茶や、電話で話をさせていただくようになった。大人になりかけの私に、エッセイの名手である伊丹さんは、人生に大切なヒントをいくつも教えてくださった。

仕事や、彼氏と上手くいかない話などいろいろしたけれど、その度に哲学者のような答えが返ってきた。

『ミンボーの女』の試写会の時が最後のお姿となった。

建築家の阿部勤氏のお宅に伺った際、伊丹監督の古い映画の話になり『親子丼』と『二日酔い』というシュールな作品を勧めていただいた。阿部さんも伊丹さんと同じく料理好きで、二人の姿が重なった。穏やかでダンディな、スキンヘッドの85歳。

「伊丹さんも、生きていれば先生ぐらいの年齢ですね」

シェーブルチーズと赤ワインを飲みながら、しみじみ語り合った。

Profile

東京都生まれ。新刊『一流のサービスを受ける人になる方法　極（きわみ）』（光文社 知恵の森文庫）が好評発売中。恋愛・結婚についての辛口エッセーや、成功と孤独に焦点をあてたビジネス書など、電子書籍を含め著書は50冊を超える。 世界50カ国以上を訪れ、多彩な人脈を持つ。
http://www.itsuka-k.com